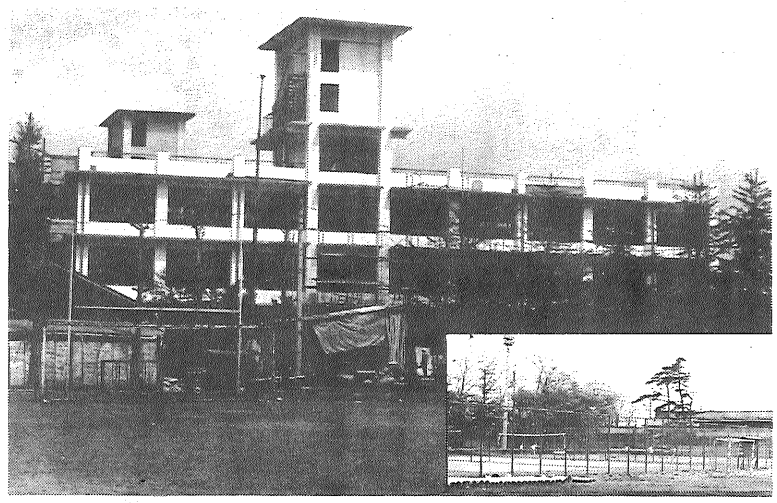
新校舎完成へ！ 鉄筋４階

― 木造校舎とりこわし

昭和３８年に完成した普通教室１０教室を皮切りに、第２期に普通教室４、第３期に化学・生物・物理・地学の各理科教室（それぞれ準備室付）が昨年までに完成している。それに加え、今年５月、普通教室５、事務室、定時制職員室、校長室、用務警備員室を収容する南側校舎が完成する。この結果、旧校舎は、西側の体育館、旧理科２教室を残し、全部とりこわされることになった。数々の思い出の残る木造の校舎がこわされてしまうのは何かさびしい思いがするが、これからは、すき間風や、雨もりに悩まされることなく、明るい教室で、後輩達は勉強できるのである。入れものは明るい立派なものができ上った、中身である後輩諸君の一層の躍進を期待する。



むさし同窓会

編集発行
武蔵野市境４－13－28
都立武蔵高校
同窓会編集委員会
（電話武蔵野（51）4554番）
印刷所　三幸印刷社
武蔵野市境３－１－10

編集局よりおねがい

次号からはもっと広範囲の会員の方々から取材いたします。特定の方に記事を依頼することも考えられますので、その際にはぜひ積極的に御協力下さい。

論説

外へとび出せ ― 総会を考える ―

毎年、総会の運営方法が取り上げられ、いろいろな、改善案が、出される。しかし、その度（時間の不足も原因となっているが）改善案の不備等で今まで通り、母校体育館でさしてかわりばえのしない趣向で茶をにごすのが落である。三十周年を明年に控えて、何か同窓会の意義と役割を同窓生全員に示しうる、少なくとも、同窓会の存在を同窓生の心の中に喚起しうる積極的な試みが今や絶対に必要である。

まず、必要なことは、同窓会の性格をはっきりさせることだ。幹事会などで十分に討論し、スローガンなどを掲げるのも一案であろう。

同窓会＝先生と過ぎし昔を　なつかしむ会

というイメージを打ち破らねば　マンネリから脱し得ないのである。

今まで出された意見に次のようなものがある。

一、集中登山（ハイキング）
　特定の山（コース）を決め、集合時間までに思い思いのコースから集合地へ向う。自然の中で同窓生と語らい、おどる。

二、一流ホテル等での会食・パーティ（椿山荘等で）

三、公会堂等で文化祭（演劇・コーラスの発表）

四、同窓生合同体育会

五、劇場（厚生年金ホール等）公会堂での音楽会

等々である。どんなプランで行うかは、これから長い時間と慎重な討論とを要する。（今までどおり母校の体育館でやると決定されるかもしれない）

毎年、一番新しい会員が大半をしめ、古い会員の方々は数人といった総会が持つ欠陥を見きわめ、より親しめる。会員も特別会員（旧職員）の方々も、もっと気楽に集まれる会を皆んなの力で築き上げていこうではないか。

五月十一日の今年度の総会には、ぜひこの問題も議題として取り上げてもらいたいと思う。



校庭も模様がえ いちょう並木切られる？

校舎の増新築工事に併行して、校庭の改造も行なわれている。分散していたテニス・バレーコートを東側に一例に集め、金網で囲った。

今後は、旧校舎取りこわしの後を整地し校庭を拡張する。

完成後は、校庭の広さにおいては以前とあまりかわらないものになるとのことである。

昔をしのぶ松林はすでにないがさらに南側校舎の前に植わっている、いちょう並木と桜の木数本が切り倒されることになりそうである。何とか保存を、との声も上っているが……。

新任の先生方の横顔

家庭科　榎本紀子



母校の教壇に立てますこと大変嬉しく思っております。昨年までは私立高校に勤めておりましたが私自身に武蔵風がしみこんでおりますので、とかくなじめないで困りました。校舎も先生方も目に見えるものは変りましたけれど武蔵の『におい』は少しも変っておりません。この中で私の青春を燃焼させてみたいと思います。

社会科　小林和彦



八王子の都立富士森高等学校に十五年間勤めていましたが、このたび、久保田先生の後任として本校にまいりました。多くの学校が公害などのため、その環境が年々悪化している今日、本校が今なお武蔵野の面影を残して、勉学に絶好の環境をもっていますことは何よりと思います。自由な雰囲気のなかに自律的な活動をしている生徒諸君と共に、伝統ある武蔵高校の名を一層高揚すべく努力するつもりです。よろしくご指導下さい。

社会科　吉田政史



学校を出て以来、他の職業でメシを食っていた二時期を除き、四年半定時制高校ですごしてきました。今、全日制高校へ移ってきて生徒数が多くて細かい指導が出来ないこと、全てが大学入試の制約を受けていそうなこと等をそうにないこと、全てが大学入試感じて、とまどいと重苦しさの中におります。

国語科　佐々木啓之



この三月まで本校定時制の専任として勤務していましたが、このたび夜の生活から足を洗い、全日制の専任として赴任してきました夜と昼の生活の相違にとまどうことばかりですが、できるだけ早く昼の生活に慣れて楽しい授業をしたいと思っております。

どうぞよろしく

転退職の先生方

① 教　科
② 転任校
③ 着任年月日
④ 在校年数



久保田省吾先生
①社会科
②都立久留米高校
③25.4.1
④19年



志津止女子先生
①家庭科
②退　職
③18.4.1
④26年



高村元継先生
①国語科
②都立小山台高校
③39.4.1
④5年



小島章一先生
①社会科
②退　職
③42.4
④3　年

土曜読書会へのご案内

毎月１回土曜の夜、田部井文雄先生をかこんでの読書会です。ことしは８年目を迎え、新風のほしい頃。気軽に御参加下さい。

と　き・毎月第２土曜日午後５時半より
ところ・武蔵野公会堂

4月 どくとるマンボウ青春記	10月 檜家の人々
5月 ぶえるとりこ日記	11月 毛沢東伝
6月 人間ある個人的省察	12月 人間の条件（マルロ）
7月 万延元年のフットボール	1月 絵　本
8月 明　暗	2月 若い詩人の肖像
9月 雑誌「世界」5月号	3月 未　定

同窓会総会

五月十一日（日）一時より体育館

◎ＯＢ合唱団・ＯＢフォークソンググループ等のアトラクションもあります。

なつかしいあの顔、一緒に笑い、泣いたあの日々
我々の青春の一ページ
新鮮で強烈に胸に残っている思い出!!
青春よもう一度!!
来たれ、われらの同窓会!!

当日には、すでに武蔵を去られた先生方も現在も母校で教鞭をとられている先生方も多数、御参加下さるとのことです。恩師を囲んでの団らん、何と楽しいことではありませんか。

◎当日クラス会を予定されているクラスの幹事の方は、受付へお申し出下さい。ポスターと会場を本部で準備いたします。

さようなら

久保田省吾

赴任前の三月友人に連れられてK校長に面接に行きました。門らしい門が見当らないので生垣をくぐり抜けグラウンドを横切って井戸端から校舎に入りましたそこに匂うばかりの美人が居りました。今有名なテレビタレントTさんその人でした。

「武蔵境」

「信濃境」違い辺境の感じでした。

十周年記念の日。祝いの酒にほろほろと紋付袴で野球を楽しみ、スライディングもしました。

大雪の日に登校した一年の男子諸君とヴィーナスの雪達磨を見事に仕上げました。

運動会の夕、松明をかざして文化祭を祝いました。

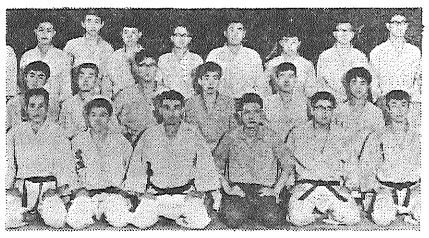
1Fの男子と遅退後迄ソフトボールに興じM先生に大喝されました。

2D教室で大釜に大飯を炊いて大喰いして落語同好会のスタートをしました。

六・七月の暑い日に草むらに畳を敷いて汗だくだくで柔道をしました。

大雨の日。廊下を歩いていますと天井が頭に落ちて無惨な姿になりました。幸いテックスでしたので命は無事でした。

ある年新一年の担任になりました。



八ツ岳で夜営した時水汲みに行った生徒が一人行方不明になり胆をつぶしました。

蓼科で雨中明治場へ強行軍しました。水につかり泥だらけになり乍ら一人も落伍せず不服も云いませんでした。

妙高で大滝を賞で乍ら握り飯の喰い比べをしました。

十和田湖でたった二人旅情を味いました。

校舎に附属した小屋住い、称して玄住庵。弟と野菜作りの自炊生活でした。焼酎の一升罐が大低ありました。

いくらかは生徒にももて父兄からも少しは祟われました。

想い起してくれる諸氏もあろうかと思います。十九年の才月はあっという間に過ぎて、私も温い思い出の数々に満され乍ら「むさし」を去ることになりました。

欅林の新緑も鮮やかな、清流の音も爽やかな久留米高校に再び武蔵野の面影を求めての転任です。

遠く離れてみると今迄知りえなかった「むさし」の姿が手にとるように見えて参ります。不馴れな新任校の、三階の準備室で今迄々と「むさし」を偲んでいます。清純な瞳、誠実な人格。数千の諸君から受けた印象が今深く体内に充ちています。重い憂いの日、教壇で語ることがどれ程私の心を救ってくれたことか、その日々の事今さすがに若い人々と離れて行くに従って何処とも分らず徴が生えてくるようになりました。「これはいかん」と感じました。その時偶然にも転任の話がありました。「流水不急」ですが私は遅すぎたようにも思います。四十代にして変ることの辛さも聞いたり思ったりして知っていました。昨年生徒部を任せられた時、古い言葉を想い出しました。「艱難汝を玉にせん。」と。又そう覚悟して変ることに踏み切った訳でした。

新任式、離任式を始めて経験して思うこと様々。荷物を整理した序に心の整理もきちんと済せてと言いきかせたのに、心だけは昔に残るあわれさを除きえないでいます。が新しい環境に囲まれて少しずつ目標をつかめるようにもなりました。再び全く新鮮になろうとあれやこれや煙たがられる仕事を引受けるようにしています。

二十代の「むさし」と。四十代の「くるめ」と。生徒を想う一念に変りなく生きようと考えています。今迄共に楽しむ傾向が過ぎていたので、これを機会に勉強もと思ってはいるのですが。

「むさし」は心の泉でした。後二年たつと全く無縁になってしまいます。せめて諸君と街や村や乗物で顔を合わせたときはにっこり笑って挨拶をしたいと思います。

そして「むさし」の良き思い出にひたりたいと感じます。

未熟な私に豊かな自由な生活を認めて下さった先生方に深謝致します。奔放な青年をよき友として終始情を深くしてくれた諸君に深謝致します。

目下時間の滔々たる流れに喘いでいます。三十代の年を充実しめること。同窓生の諸君が憂いなく悔なき人生を過されること祈ってやみません。

別離の哲学よりも先に万感交々至ってかくの如き程度の低い雑文になってしまいました。諒とせられよ。

一九六九・四・一七

無題

19期　玉井徹

嵐は過ぎ去った。雨が古い地表を洗い流して、そこには彼らが初めて見る土が表われた。その土は何年もの間に人々に踏みしめられて固くなり、そこにあったのだけれども、その上に誰かが別の土をかけてしまったので今まで彼らは見ることができなかったし、また彼らは堀り起こしてみようともしなかった。嵐は何の前ぶれも無しにやって来た。

嵐は何年間も陸の無い海の上をきまよい、そしてここにやって来たまるでどの位暴れまわれるかをためしにやって来たように。

彼らは、必死にそれを受けとめようと努力し、ある人は、戸板を釘で打ちつけ、またある人は吹きこむままに窓や戸をあけ放しておいた。嵐が過ぎ去るのをただ待ってはたして、戸を釘で打ちつけた連中は、もっと丈夫に打ちつけないと、家ごと飛ばされるのではないか、と思った。

それから窓や戸を開け放しておいた連中は、南から来たその嵐に家中を吹かれ、それこそメチャメチャに破壊された部屋を見て、ただおどろき、たださきれかえるばかりだった。しかし、床に落ちていた、まだ緑の新鮮な葉の色や、嵐の後のあのぬくもりを感じて次第に印象を良いものへと変えていった。そしてどうしようもなく散らかっていた部屋を片づけるのにちょうど良い機会だということを悟った。まさにその通りである。

三日たった。

彼らは、ほとんど部屋の整理や、打ちつけた釘をぬいたりすることが終っていないまま、光を求めて広い野原にとび出した。そこにはあの嵐を知っているのは彼らだけで、他の人々はまるで、明日からまたあと片づけをしなければならない彼らがほんのつかの間得た光を浴びられる時間を思い切り楽しんでいる姿を、あざ笑っているようだった。

防ごうにも防ぎようのなかった嵐それはあまりにも今までに無かった嵐だった。それは夏の終りから秋口にかけて来る嵐ではなく、文字どおり〝春の嵐〟だったようだ。

また何回か来るかもしれない

昭和四十四年四月十四日

お別れにあたつて

志津止女子



なつかしい卒業生の皆さん

その後もお健やかにお過しでいらっしゃいますか？

私はこの三月末日付で武蔵高校を退職させていただきました。昭和十八年四月以来、「わがむさし！」「うちの学校！」と思いこんで来たのですから、先生方や生徒の皆さんとのお別れはもちろん、校庭の樹々にも草々にも思い出は数多く、別離の悲しさは云い難いものがございます。

ほんとうによい学校であった！心暖かな先生方であった！

清純で誠実な生徒達であった！

現在自分のいる学校を大好きなよい学校と思うことはなかなかむづかしいのですが、武蔵はそういう学校であったように考えられます。長所と短所はうらはらのことが多いですから考えねばならぬ点もあるでしょうが、私はこのような武蔵の校風を誇りに思い、其処で過させていただいたことを感謝しています。

そして現職ではなくなりましても武蔵高校の教師であったということの責任は終生、私の心を離れてはならない、と考えています。これまでも、これからも私にできることなどは微々たることですが、それでも何かお役に立てば……と思っています。後任に、卒業生の榎本先生が来て下さったことも、私のよろこびでございます。

これからの私は、自分としては大変好奇心と研究心をそゝられる主婦専業という生活を始めようとしています。前途多難です。しかしそれがまた私に人間の生き方を考えさせてくれるものでありたいと思っています。

武蔵同窓生によせて

小島章一



可愛らしいまた若々しい声で、武蔵高校生達が「真理を愛する」という言葉のある校歌を歌うのが私の耳深くこだましています。かって、国木田独歩は、武蔵野の林の中で、そぼ降る雨の音の中に、万有のうちに秘める真理の音をきいたと言う。しかし、その武蔵野の林は今はもうない。だが全くどこにもないだろうか。否、私は二ケ年有余の間、武蔵高校生に接して春夏秋冬にさまざまに表状を変えながらも、常に静かに大地に生いしげる緑の「やさしさ」は武蔵高校生のいのちの中においしげっていると思う。人間の一生なんて短いものである。青年の日にすでに、老いたる日のことを思い心の準備もしなければならない。それゆえにふと、「自らの若さ」を、おれは若いんだ！と思わず叫びたくもなるのである。併し幾人の人が真実、身自らの生命を生きたでしょうか。

今度、私も恩師やら先輩のはげましもあって、高校教師をやめ、研究に専念します。もう間もなく四十六才になります。細い字で書かれた本を読む時は眼鏡をはずさなければならない程眼は近視且老眼となったけれど、最後の生命力をふりしぼってここ五年位しっかり勉強して、恩師や友情に答えたいと思っています。

どうか、私の好きな、武蔵高校卒業生諸君、勉強で疲れたりしたら、四十六才の「はげ」が最後の勇気をふりしぼって勉強し、生命の青春をなんとか讃美していることを思い出して下さい。幸い研究の傍ら、二、三の大学に講座を持ってもいますので、どこかでふとまた教師対学生となり互によろこびあう事があれば楽しいね。とにかく私のような教師に親切で有難う住所も私は武蔵高校に近いので、遊びにどうぞお立寄り下さい。

武蔵を去るにあたつて

高村元継



マルクスアウレリッス皇帝の瞑想録は、全編謝念の文字に溢れている。私も同じ口吻をもって武蔵高校から受けることのできた数々の事柄に今さらのように、人生を人生として確認してた感謝あるのみである。武蔵高校をかけがえのない心のふるさととして、心からその発展を祈ってやまない。